

問題・解答  
用紙番号

8

の解答用紙に解答しなさい。

## 国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、  
理工学部(住環境デザイン学科【文系型】)、看護学部、農学部【文系型】

問題は100点満点で作成しています。

**I** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なおこの文章は、ソヴィエト連邦（ソ連）の翻訳に関するものである。ソヴィエト連邦は一九一七年のロシア革命（十月革命）により誕生した、マルクス主義にもとづく社会主義国家で、現在のロシア、ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタンなどの国々によって構成されていた。（五七点）

ソヴィエト連邦では、民族文学の創出と同時に、ロシア語と各民族語のあいだでの翻訳が推奨された。一九三四年の第一回ソヴィエト作家会議の結語演説で、スターリニズムの賛同者となったゴリキーは、「諸民族共和国、及び諸州の現在のサンブンや詩の集をロシア語で、よき翻訳によつて是非出版しなければならない」とうつつえた。

実際、ソヴィエトでは翻訳者の全国的シンポジウムがたびたび開催され、翻訳の方法論について議論された。ゴリキー記念文学大学のような高等教育機関では翻訳コースが開講され、翻訳者が養成された。翻訳における問題や方法論をあつかう専門的な文集が定期的に刊行された。そして、自国でいかに翻訳がさかんであるか、そのことを民族の友好の証、先進的な文化の証として国内的にも国外的にも誇るようになった。一九五五年の第二回ソヴィエト作家大会で、作家ニコライ・チーホフ（一八九六―一九七九）はソヴィエトでいかに翻訳が出版されているかを部数をいちいち列挙したうえで「世界文学の誇り、人類の名誉と栄光であるとする名」がそこに全部見つかるとした。

かくもソヴィエトで翻訳は重視された。研究者のアンドルー・ワフテルも指摘するように、通常「帝国」では、翻訳においては「輸出」が「輸入」にくらべて圧倒的に多くなる傾向がある――植民地に自国の文化を押しつけるためだ。それに対してソ連では、各民族語へのロシア文学の翻訳

(輸出)だけでなく、<sup>A</sup>各民族語文学からのロシア語への翻訳(輸入)も多いという特徴があった。たとえば一九六四年には、刊行された七四六八編の文芸作品のうち二三九七編が翻訳であり、それらの作品はロシア語から五十三の言語に訳されたものと、八十五の言語(うち四十二はソヴィエト内の民族語)からロシア語に訳されたものだったという記録が残っている。もちろん多民族・多言語の連邦国家であるソヴィエトと単純な比較はできない面があるが、割合だけで考えれば、欧米や日本よりもはるかに大きい。

a

制度面も翻訳を後押しした。もとよりロシアは多民族国家であることを理由に国際的な著作権条約に加盟していなかったが、ソ連もその姿勢を引き継いだ。ソヴィエトでは、翻訳は出版社の利益のためでなく、社会主義文化の( 1 )のための道具とされた。そのため「翻訳自由の原則」がかかげられ、翻訳に原著者の許諾を要しないことが定められた。ただし「自由」といってもソヴィエトでは計画出版が原則であり、検閲もあって、個人が好きな作品を(とりわけイデオロギー的な問題がある西側の作品を)自由に翻訳出版することは不可能だった。この規定が<sup>②</sup>ネットウにおいていたのは、主に連邦内の共和国間の翻訳だった。共和国同士(あるいはもともと小さな民族共同体同士)の文化的交流をうながすため、<sup>③</sup>シヨウヘキはもうけるべきではないとされたのだ。

b

ソヴィエトで、翻訳者は単にコミュニケーションを仲介する役割だけでなく、国内の無数の民族をたばねる<sup>i</sup>プロパガンダイストの役割をはたした。先述の第二回ソヴィエト作家会議で翻訳者もほかの芸術家と同じく「社会主義リアリズムの闘士」でなくてはならないと定義された。中央アジア言語の著名な翻訳家セミョーン・リップキン(一九二一—二〇〇三)によれば、ソ連で「文芸翻訳は「中略」社会主義国家のコミュニテイの設立という、より困難で差し迫った目的のために」なされたという。しかし、民族語からロシア語への翻訳が重視された結果、<sup>B</sup>奇妙な事態も生じた。ワフテルは次のように述べている。

たとえばガザフやタタールの偉大な叙事詩が、はじめて出版刊行されるのが、原語ではなく、ロシア語だということもままあった。言うまでもなく、(実際にオリジナルがあればの話だが)翻訳ではオリジナルがかかえた「ソヴィエトの政治思想からみた」「誤り」は修正されていた。

実際に、ロシア語翻訳をつうじて民族(国民)文学が「創造」されたケースもあったとされる。カザフの詩人ジヤンブル・ジヤバエフ(一八四六—一九四五)は、一九三〇年代に民族の友好キャンペーンが口承文芸を「再発見」していくなかで、ダゲスタンの詩人スレイマン・スタリスキー(一八六九—一九三七)とならんで地位を高められた詩人だった。カザフスタンにはいまでもジヤバエフにちなんだ通りがあり、その銅像が建っているほどだが、実はその詩のかなりの部分は本人が書

いたものではなく、記者や秘書によってつくられたものだったという。一説によれば、一九三六年にかザフ・ソヴィエト社会主義共和国の書記長が他民族のようなギンユウ詩人をもつことをもとめたため、周囲の詩人や翻訳者によってジャバエフがカザフの国民詩人にしたてあげられた。帝国の官僚主義と翻訳が国民文学を「創造」したわけだ。このジャバエフの詩は、『世界文学叢書』の第一七九卷『ソヴィエト連邦詩集1』の巻頭におかれさえした。

右記のような事情によって、ソヴィエトには無数の各民族語文学——ウクライナ語文学、ベラルーシ語文学、タジク語文学、ウズベク語文学など——が存在するようになり、ロシア語から各民族語への翻訳だけでなく、各民族語からロシア語への翻訳もおこなわれるようになった。ソヴィエトの唯一の公式の作家団体であるソヴィエト連邦作家同盟も、ロシア人作家は半数程度であり、残りは各共和国、自治体の代表が占めていた（こうした構造は、作家同盟の地方支部から出発して上へ、中央へとぼりつめていく「文学官僚」を生み、権威主義の弊害をもたらした）。

c

当然ながら、多民族・多言語文学としてのソヴィエト文学は、『世界文学叢書』にももちこまれている。叢書の巻号目次を見てみよう。全体二百巻のうち、ロシアをふくめたソヴィエト文学にあてられているのは六十一巻（民族の幅をどうとるかでこの巻数は変化する）。うち、ロシア文学だけにわりあてられたのが四十一巻。残りの二十巻にはなんらかのかたちで「ソヴィエト」文学が入っている。そのなかには、ウクライナの国民詩人タラス・シエフチエンコ（第一二四巻）やベラルーシの国民詩人ヤンカ・クパーラやヤクブ・コトラス（第一五六巻）、グルジアの国民詩人ショタルスタヴェリ（第二七巻）、タジク、ウズベク、カザフの国民作家の巻が（ロシアの国民詩人プーシキンと同じように）もうけられている。こうした詩人たちは一九三〇年代の「民族の友好」時期にその地位を高められたものが多い。

（ 2 ） 右記のような作家ごとに独立した巻だけではなく、「ソヴィエト連邦」をかかげた時代別のアンソロジーが、何巻かもうけられている。以下の八巻がそうである。

第十三巻『ソヴィエト連邦諸民族の英雄叙事詩集1』

第十四巻『ソヴィエト連邦諸民族の英雄叙事詩集2』

第五十五巻『四世紀から十八世紀のソヴィエト連邦諸民族詩集』

第一〇二巻『十九世紀から二十世紀初頭のソヴィエト連邦諸民族詩集』

第一七九巻『ソヴィエト連邦詩集1』

第一八〇巻『ソヴィエト連邦詩集2』

第一八一巻『ソヴィエト連邦短編小説集1』

第一八二巻『ソヴィエト連邦短編小説集2』

このうち、第一七九巻から第一八二巻の四巻は、十月革命を起点とする通常のソヴィエト（の多民

族) 文学の範疇におさまっている (もともと、<sup>⑤</sup> 同伴者やボウメイ者など主義主張が多様だったソ  
ヴイェト連邦で「ソヴイェト文学」という名称が定着したのは一九二〇年代後半だったとされる)。  
ソヴイェト文学の短編、詩の同様なアンソロジーはよく編まれた。

『世界文学叢書』特有の問題が生じていて注目されるのは、連邦成立以前のソヴイェトの民族文  
学をあつかった巻だろう。数十にもものぼる雑多な民族の作品群を、「ソヴイェト」の名のもとにあ  
つめ、なおかつその「発達」を時代を追ってあらわし、「世界文学」として提示するためには特有  
のロジックが必要とされた。

西洋にかんしては、マルクス主義にもとづいた文学の体系化、理論化は革命前から試みられてい  
た。たとえば、<sup>\*</sup> ポリシエヴィキであり、モスクワ大学文学部長など要職についたウラジーミル・フ  
リーチエ (一八七〇—一九二九) は、文学の発達過程が経済的・階級的形態といかに対応している  
かの説明を早い段階からこころみていた。その主著、『欧州文学発達史』(一九〇八)は、「自然経  
済時代」「商業資本主義時代」「絶対主義時代」「ブルジョワ社会」といった区分に、ヨーロッパの  
各時代の文学をあてはめて説明するものだった (なお、本書をふくむフリーチエの主要な著作は日  
本でも翻訳紹介された)。フリーチエの研究は死後の一九三〇年代には「俗流」として国内で批判  
されたが、六〇年代には「重要な仕事」と再評価されてもいた。 d

また、ソヴイェトのドイツ文学者フランツ・シルレル (一八九八—一九五五) は、三巻におよぶ  
『新時代の西洋ヨーロッパ文学史』(一九三五—一九三七)を著し、十七世紀以来の西洋の反ファシ  
スト文学を体系化しようとした。

ただし、右記のような「理論」は、おしなべて西洋文学を対象にしたものであり、東洋の「若  
い」民族に適用できるかは未知数だった。もちろん、革命を起点として生じた新国家ソヴイェトの  
文学史は編まれていた。『世界文学叢書』と同じく革命五十周年を記念して科学アカデミーによつ  
て編集された七巻本の『ソヴイェト連邦諸民族文学の歴史』(一九七〇—一九七四)は、十月革命  
から半世紀間にわたる社会主義リアリズム文学の紹介だった。

しかしそうした諸民族の文学、特に東方の諸民族の革命以前の文学を、『世界文学叢書』のよう  
な場で、どう位置づけるのかは難しい問題だった。諸民族には歴史的にもマルクス主義的な発展段  
階を経ていないものもあり、革命まではほとんどフォークロアのような口承文学しかなかったものも  
あつて、その様式の変化をどうとらえるのかは学者のあいだで議論されていた (たとえば、英雄叙  
事詩から ( 3 ) に社会主義リアリズムの文学へと発展したととらえていいのか、という)。  
ソヴイェトの文学界ではなんらかの「法則」の必要性が叫ばれていた。

そこで登場したのが、<sup>D</sup> 「東洋のルネサンス」という概念である。<sup>\*</sup> 唯物史観において、ルネサンス  
は欠かせない歴史上の画期であつて、マルクスもエンゲルスもルネサンス期の文学を重視したこと  
は先のシルレルの論文も指摘している。一九五〇年代中頃より、東洋学者ニコライ・コンラドが提

唱したのが「東洋のルネサンス」であつて、中国を中心とした文化圏にもルネサンスが（むしろ本家の西洋に先がけて）八世紀から十二世紀に興つたという学説だつた。 e

実際に、コンラドの名前は『世界文学叢書』の東アジアをあつかつた巻の序文でも登場するが、「東洋のルネサンス」理論にかんして言えば、むしろ、（コンラド自身は日本・中国・朝鮮を専門とする学者だつたにもかかわらず）ソヴイェト文学をあつかつた巻で大きくとりあげられている点が注目される。たとえば、第五十五巻『四世紀から十八世紀のソヴイェト連邦諸民族詩集』の序文を見てみよう。この巻では「四世紀から十八世紀」という長い期間の文学があつかわれているが、採録されているのはイラン・タジク、チユルク、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンなどの東方諸民族の詩作品がほとんどを占め、なかにはイブン・スィーナーのようなイスラム思想家もふくまれていた。ちなみにこの巻は、「四世紀から十八世紀のソヴイェト連邦民族の詩を総合的に提示して、封建制の時代の詩に特有なアンソロジーをつくらうとした点では、国内・国外とも、初の試み」とされていた。同巻序文の解説には次のようにある。

歴史を科学的に解明するマルクス主義には、世界文化の発展に共通規則を発見した功績がある。つまり現在を、歴史の過程全体の一部として解釈するのだ。その発展は社会的な形式の交替という観点から観察される。中世全体にわたる明晰な評価は、科学アカデミー正会員ニコライ・コンラドが、その高名な著書『東洋と西洋』で示しているとおりである。

つまりどういうことか。マルクス主義が「科学」である以上、世界に<sup>iii</sup>あまねく適用可能な法則をあつかつていなくてはならない。その指針を示したのもとして持ちだされたのが、東洋学者で科学アカデミー正会員のニコライ・コンラドが東洋に適用した理論なのだつた。

ごく最近まで「野蛮人」として扱われていたり、まったく知られていなかった新しい人民が脚光をあびており、地球の人間の構造が変化している。それら自身が、いまや世界史の進むべき道を定義するようになり、「今後の現代の民族の形成を基礎づけ」たのだ。

世界は、科学アカデミー正会員ニコライ・コンラドが示したように、新たな民族的座標のみならず、イデオロギイ的座標をも手に入れる。

コンラドの「東洋のルネサンス」理論によつて、いままで軽視されてきた東方の諸民族も、マルクス主義的な発展段階にあることが明らかになり、このような雑多な、別々の歴史をもつ民族の詩をさかのぼつて集成したアンソロジーも、体系的な「世界文学」のサンプルとしての価値があることになった。

\* ポリエタイキ……ロシア革命の主力となった革命党派。ソヴィエト政権を樹立した。

\* 唯物史観……マルクス主義にもとづく歴史観。

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① サンアン

- ア 趣のある路地をサンサクする
- イ 出張に伴う費用をシサンする
- ウ 文化イサンを巡る旅を楽しむ
- エ プロジェクトにサンカクする

② ネットウ

- ア 橋にケイネン劣化が発生する
- イ インネンの相手に再び敗れる
- ウ 勝利へのシエウネンを燃やす
- エ 余暇の時間をネンシエツする

③ ショウヘキ

- ア 代案にはショウフクしかねる
- イ ショウサにできる資料を探す
- ウ その決断は時期ショウソウだ
- エ 破れたショウジを貼り替える

④ ギンゴウ

- ア 日本ユウスウの企業を目指す
- イ 祖父はドイツにガイゴウした
- ウ 政治的理由でユウヘイされる
- エ 退職に至ったジゴウを明かす

⑤ ボウメイ

- ア コンメイする世界情勢を憂う
- イ メイジツともに偉大な学者だ
- ウ 現代芸術にカンメイを受ける
- エ 部のリーダーをハイメイする

問二 二重傍線部 i～iii の言葉の本文中の意味として最も適切なるものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i プロパガンデイスト

- ア 販売促進の活動を行う者
- イ その分野を本職とする者
- ウ 主義や思想を宣伝する者
- エ 特定の業務を統括する者

ii 範疇

- ア ある事象や概念が属する領域
- イ 判断や行動等の拠るべき基準
- ウ 手本となる優れた行動や状態
- エ 文章の書き方を解説した書物

iii あまねく

- ア 抵抗に構わず無理に行う様子
- イ 広く行き渡っている様子
- ウ そのことだけをする様子
- エ すべてを同じように扱う様子

問三 空欄（ 1 ） ～ （ 3 ） に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- |   |      |   |           |   |        |
|---|------|---|-----------|---|--------|
| 1 | ア 監視 | 2 | ア さらに     | 3 | ア なし崩し |
|   | イ 相剋 |   | イ もちろん    |   | イ 堂々巡り |
|   | ウ 解体 |   | ウ したがって   |   | ウ 一足飛び |
|   | エ 促進 |   | エ にもかかわらず |   | エ 数珠繋ぎ |

問四 次の一文が入る最も適切な場所を、本文中の  a  e のうちから選びなさい。

これにより、中国や日本にもマルクス主義的な文学の発展段階をあてはめることが可能になった。

問五 傍線部 A 「各民族語文学からのロシア語への翻訳（輸入）」がソヴィエトにおいて多かったのはなぜか。次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 欧米や日本に比べるとロシア語に訳されたものが少なかったため。
- イ イデオロギー的な問題がある西側の作品を出版できなかったため。
- ウ 連邦内の共和国同士の文化交流をうながす目的で推奨されたため。
- エ 植民地の文学に対してロシア語の使用を押しつけようとしたため。
- オ 各民族をたばねて社会主義のコミュニティをつくろうとしたため。

問六 傍線部B「奇妙な事態」とはどのようなことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 原語の叙事詩にあった語種をロシア語翻訳があらかじめ修正したこと。
- イ 詩人本人が原語で刊行していない詩がロシア語で翻訳刊行されたこと。
- ウ ソヴェエトとは無関係の詩が『ソヴェエト連邦詩集』に掲載されたこと。
- エ 各共和国代表がソヴェエトの作家同盟からロシア人作家を追放したこと。
- オ 連邦の各共和国の官僚がその民族語で書かれた国民文学を要求したこと。

問七 傍線部C「特有のロジック」が必要とされたのはなぜか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア マルクス主義にもとづく文学の理論化を、マルクス主義的な発展段階をもたない東方諸民族の文学に適用することが難しかったため。
- イ 文学の発達段階が経済的・階級的形態と対応しているとしたフリーチエの研究が、ロシア革命後には国内で批判されていたため。
- ウ 東洋の「若い」民族の文学を、十七世紀以来の西洋の反ファシスト文学のなかに位置づけることができるかは未知数だったため。
- エ 十月革命後につくられた社会主義リアリズム文学を紹介する『ソヴェエト連邦諸民族文学の歴史』を纏纂する必要があったため。
- オ 口承文学の様式の変化については革命前から学者同士で議論されてきたが、それは西洋文学を対象としたものにすぎなかったため。

問八 傍線部D「東洋のルネサンス」という概念について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア コンラドが提唱した「東洋のルネサンス」は、東方諸民族に対しても唯物史観が適用可能であることを示した理論である。

イ 「東洋のルネサンス」理論は、これまで野蛮人とされてきた東方諸民族もマルクス主義的な発展段階にあることを明らかにした。

ウ 「東洋のルネサンス」理論により、歴史的な関連性の薄い民族の詩が「ソヴェエト」と名づけたアンソロジーに集成された。

エ マルクスもエンゲルスも「東洋のルネサンス」の時期の文学を重視したことがシルレルの論文によって指摘されている。

オ 「東洋のルネサンス」は西洋だけでなく中国を中心とした文化圏にもルネサンスが興っていたことを指摘する学説である。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四三三点)

「社会距離」や「公衆距離」を空間の人類学として概念化したのはエドワード・ホールだが、「ソーシャル・ディスタンス」自体は、彼の発明ではない。それはホールに先行する社会学的研究で出てきた概念で、時代も第二次大戦前の一九二〇年代である。この時代のアメリカは第一次大戦後の好景気に支えられ、ニューヨークやシカゴをはじめとした北東部や中西部の大都市に人口が流入し、消費と余暇を謳歌<sup>a</sup>する、いわゆるジャズエイジが訪れていた。戦後ホールらが拠点にしたシカゴでは、すでに一八九〇年代に人口が一〇〇万人を超え、アメリカ第二の都市となっていた。世界で最初の高層ビルが建設されたのもシカゴで、摩天楼と呼ばれる建築群は急成長するアメリカ都市の象徴となってゆく。ビルの高さと同比例するようにシカゴの人口も増え続け、三〇年間で人口は倍増、一九二〇年には二七〇万人を数えるほどになっていた。

その頃シカゴ大学で活躍した社会学者に、ロバート・E・パークがいる。新聞記者や合衆国南部で黒人の教化事業などを経験した後、シカゴ大学に招かれて学者になったという経歴の持ち主のパークは、急成長する大都市を舞台にアーネスト・W・バージエスらとともに、いわゆるシカゴ学派の黄金時代を築いた。国外からも国内からも移民が押し寄せ、みるみる風景が変わってゆく都市は、人間集団を研究する学者たちにとっては、ある意味で理想的な環境だったとも言える。パークらは動植物が空間をどのように占拠してゆくかといった生態学的な視点を取り入れ、空間における配置と人間の行動との関係や、それが社会制度に及ぼす影響を研究して大きな成果をあげたのだ。

そのパークが一九二四年に発表した研究に「社会的距離の概念について」<sup>A</sup>という論文がある。副題に「人種的態度および人種関係の研究への応用」とあるように、この論文でパークは、近さ―遠さという距離で表現するような親密度を、社会学的な調査に应用できるような概念として定義を試みている。そこで社会的距離の概念は、人種間の距離を測定するための実践的な方法として、登場しているのである。

そもそも人間関係にとって遠近という距離は、ごく日常的な表現である。日本語でも、誰々とは近しいと言ったり、遠縁にあたりと言ったりする。それは距離が関係のメタファーとして定着しているからだが、パークはそうした遠近のメタファーを親密度として測り、そこから社会における人種間の関係を明らかにできると考えたのだ。

この考えを押し進めたのがエモリー・S・ボガードスだった。シカゴ大学で学んだ後、西海岸に移り、パークとともに「太平洋岸における人種関係調査」プロジェクトに携わったボガードスは、社会的距離概念を測定できるようにするための「スケール」を考えた。具体的には、親密度を量的に把握するための尺度を考案して、それをさまざまな人種に対して行うアンケート調査に質問表と

して組み入れた。親密度の量的把握という複雑に聞こえるが、内容はごく単純なものである。たとえば、結婚してもよい、近隣に住んでもよい、自分の国に来て市民になってもよいといった項目が七つあり、質問表にある人種がどれに該当するか選ぶというものである。パークによる社会的距離概念に改良を加えたことから、この社会的距離尺度は、別名「ボガトダス・スケール」としても知られている。

独創的なアイデアとも言えるが、それが都市社会学の本拠地シカゴから出てきたのは、時代背景を考えればそれほど不思議ではない。パークやボガトダスが太平洋岸という広域を対象にした調査を行ったのには、当時この地域で移民、特に東洋系移民をめぐって白人との対立が深刻化していたという背景がある。すでに人種差別主義は全米に拡大し、KKKのような白人純血主義者の集団が黒人に対し、公然と暴力をふるっている世の中である。

またパークが前述の論文を発表した一九二四年は「排日移民法」が制定された年でもあり、事実上日本からの移民を不可能にするだけでなく、在米の日本人社会にも、その地位の低下をまねく影響を及ぼしていた。ちなみにパークには「仮面の背後にあるもの」というタイトルで、白人がもつ日本人や中国人に対する偏見を「顔の読み取れなさ」「不気味さ」として描いたエッセイがある。当時パークらが、人種差別主義の根源を理解するためには、人種関係の社会学的調査が危急の課題と考えていたことがうかがえる。

合衆国の都市に急成長をもたらしたのは、まず外国からの移民だった。一九一〇年にシカゴ人口は二一九万人を数えていたが、そのうちのおよそ三五%が外国生まれの白人だった。ヨーロッパからの移民は第一次大戦で激減するが、その頃から南部から北部へ、アフリカ系アメリカ人の移動が始まる。いわゆるグレート・ミグレーションと呼ばれる黒人大移動の時代である。北部の労働力不足に加えジム・クロウ法下の差別と暴力を恐れ、土地を捨てて都市へ向かった農民は、二〇年代には六〇〇万人とも推定される。シカゴでは二〇年に二万人だった黒人人口は一〇年後に二二万人と倍増している。この時代にパークらが社会的距離の概念を人種に適用できると考えた背景には、多様な出自の集団が都市を膨張させるとともに、ブラック・ベルトと呼ばれる黒人が集中する居住区が生まれ、白人による差別が深刻化した現実がある。

一九一九年夏には、ミシガン湖畔で起きた殺人事件をきっかけに「シカゴ人種暴動」が発生した。ミシガン湖畔で遊泳していたユージン・ウィリアムズという名の若者が、うっかり「人種ライン」を越えてホワイトゾーンに入ったことに腹を立てた白人たちに投石され、溺死した。水上の見えないボーダーを越えてしまった少年は、白人が占有していた水域で殺されたのである。だが通報を受けたシカゴ警察は、襲撃した白人ではなく、抗議に集まっていた黒人らを逮捕。これには黒人たちも暴力的に反応し、同じ年の初めから多くの都市で起きていた一連の暴動に、連なることになった。ただ注意しなくてはならないのは、「暴動」と総称される暴力行為の圧倒的多数が、白人による黒

人への迫害だった点である。シカゴはそのなかでも黒人が抵抗し、双方に死者が出た例として知られている。

シカゴ学派の都市社会学が生まれた時代とは、東洋人移民への排外主義的政策や黒人に対する攻撃が深刻化した時代である。そしてその緊張のなかから生まれたのが、そのシカゴを対象にした都市社会学の金字塔と言われる『ブラック・メトロポリス』だった。著者はセント・クレア・ドレイクとホレス・R・ケイトン、どちらもアフリカ系アメリカ人の社会学者で、小説家のリチャード・ライトが長文の序文を寄せている。一九四〇年代に彼らはともにシカゴの黒人居住地区サウスサイドを調査に訪れていたのである。また表紙にはウォーカー・エヴァンスやドロシア・ラングらとともにFSA (Farm Security Administration 農業安定局) で優れたドキュメンタリーを残したラッセル・リーが、やはりサウスサイドで撮影したスナップが使われている。シカゴは社会学者と小説家と写真家が、緊密に協働できる都市だったということだろう。『ブラック・メトロポリス』というタイトルの本全体は、ロバート・E・パークに捧げられている。パークらの一九二〇年代の社会的距離論を批判的に乗り越え、黒人社会学者による黒人都市(ブラック・メトロポリス)の社会学が誕生したシカゴは、社会学と写真が近い間柄にあった。

いまや全世界の都市で常識と化した社会的距離の直接的な起源をたどると、一九二〇年代という時代、つまりスペイン風邪の世界的流行の直後となる。もちろんアイデアの系譜としてはさらに古い時代へと遡ることが可能だろう。ロバート・パークとの関係で言えば、<sup>C</sup>ゲオルク・ジンメルにも触れておく必要がある。パークは大学卒業後にシカゴで新聞記者として働いたが、その後大学院に進み、一八九九年から一九〇〇年にかけてゲオルク・ジンメルに師事した。

都市を対象にした社会学を創始したことで知られるジンメルの思想には、社会的距離にまつわる要素が出揃っていると言つていい。たとえば人間と人間の関係にとって、最も重要な感覚器官は目であると指摘したのはジンメルである。目は社会学的な働きをしており、たとえば羞恥を感じたり、目を伏せたりする行動を理解するには、眼差しの相互作用に分け入る必要がある。その目が位置している顔も同様である。ジンメルは人間同士の眼差しの、最初の客体は顔であると書いている。顔は「個人が彼の生活の前提としてたずさえてきたすべてのものの象徴であり、そこに堆積されているのは、彼の過去から彼の生活の根底に下降し、そこで持続的な特徴となったものである」。

ジンメルにとって、さまざまな人間が密集する大都市を理解するうえで重要なのは、このような他者の知覚なのである。それは分散して生活するか、それとも密集して生活するかといった生活形態とも関係している。ジンメルは大都市に現れてきた新しい人間関係を理解するための枠組みとして、それを「空間隔離の社会学」という言葉で呼んだのだった。

こうした考え方をいち早くアメリカに紹介したのがパークであるが、なかでも同時代のアメリカの社会学者が注目したのは、ジンメルによる「<sup>D</sup>よそ者」論だった。ジンメルは主著『社会学』のな

かにおかれた補説で、それまで扱われてこなかった異郷の人間を、ひとつの社会学的形式として取り上げた。

したがって、ここで言うよそ者とは、これまでよく言われてきたように、今日来て明日去っていく人という意味ではない。むしろ今日来て明日とどまる人——いわば潜在的放浪者という意味だ。

潜在的な放浪者は一定の時間とどまることで、遠近を自分のうちに抱え込む。

近さと遠さの一体性は、どのような人間関係にも含まれているが、ここではそれが、いちばん簡単に言って次のような構図になっている。つまり、人間関係の内部における距離とは、身近な人が遠い存在だということの意味しているが、よそ者であるというのは逆に、見知らぬ人が近い存在だということだ。なぜなら、よそ者であるというのは、言っまでもなく、ひとつのきわめて積極的な関係、特別な相互作用形式だからだ。

ジンメルはそこで、よそ者が異質性をもつ存在でありながら、それゆえに社会にとって客観性をもち得る存在として積極的な役割を果たすことに注目を促した。

こうした指摘を受け継いで、パークは「マージナルマン」という概念で大都市の移民を理解しようとした。パークはユダヤ人が典型的なマージナルマン、すなわちふたつの社会の境界で生きる人間であるとしたが、よそ者の典型をユダヤ人と書いたジンメル自身、ユダヤ人であった。パークはジンメルがよそ者という類型を示したのは、とても深い洞察によるものだと書いている。ジンメルの思想が大都市ベルリンでの生活における経験と観察に基づいたものであることは間違いないが、その『社会学』は理論化された著述である。それを吸収したパークは、同僚たちとともにシカゴやニューヨークやアメリカ西海岸における移民社会の熱い現実のなかで、社会的距離理論へと鍛えていったとも言えるだろう。

われわれにとって、<sup>E</sup>ジンメルが説いた「よそ者」の特性が興味深いのは、それが都市に現れた新たな職能としての写真家にも、ある程度あてはまるように思うからである。異郷からやってきた者は大都市に溶け込むと、都市大衆のひとりとして近接の距離にありながら、内部においては遠さを抱えている。ジンメルはこの近さと遠さのバランスに注目し、疎遠であることは、その地の習慣や価値観から離れてモノを見られるということでもあると考えて、よそ者をもつ<sup>b</sup>俯瞰的な視点と客観性を積極的に評価したのだった。

よそ者は写真史初期の発明家の時代には少なかったが、日本で最初に撮影された写真が黒船に

乗ってやってきたアメリカ人によるものだったことからわかるように、多くの写真が旅と移動のなかで撮影されてきた。特に技術的な習得がまだ限られていた時代には、写真は大都市からの移動によって成長してきたのであり、その意味で多くの写真館は「今日来て、明日もとどまる者」によって開設された。

また小型のカメラが一般化するとカメラは旅行やバカンスに欠かせないものとなり、「今日来て、しばらくの間とどまる者」がさかんにシャッターを切るようになる。こうして一九二〇年代以降はさまざまな人間が、仕事にも研究にも余暇にもカメラを持って出かけるようになっていった。社会学者や人類学者も、自らカメラを持って調査に向かう。ウォーカー・エヴァンスはエトランゼとしてパリに滞在した後、キューバで素晴らしい写真を撮影した。アンリ・カルティエ・ブレッソンの代表作の多くはフランス以外で撮影されたものである。ロバート・フランクは、故郷スイスを出てアメリカに渡り、スペインや南米を撮影した後、名作『アメリカ人』を残したが、その全作品は「よそ者」としての知覚に貫かれていた。フランクの芸術が示しているのは、カメラを通してよく世界を見ることで、人はよそ者としての視覚を手に入れられるということだろう。

(港千尋『写真論』)

\* ソーシャル・ディスタンス……社会的距離。新型コロナウイルスの世界的な流行時に、感染予防の一環として推奨された。

\* エトランゼ……フランス語 *étranger*。「よそ者」の意。

問一 波線部 a・b の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 謳歌する

b 俯瞰的な

ア 過度に求める

ア 細部をじっくり見る

イ 十分に楽しむ

イ 事柄の本質を見ぬく

ウ 徐々に増やす

ウ 全体を広く見わたす

エ 適切に控える

エ 多方面から見つめる

問一 傍線部 A 「社会的距離の概念」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 社会的距離はもともとエドワード・ホールが発明した概念であり、パークがこれを社会学的な調査に応用した。
- イ パークは論文のなかで社会的距離の概念を定義し、遠近という距離を人間関係のメタファーとして定着させた。
- ウ 都市で深刻化していた人種差別を背景にして、パークは社会的距離の概念を人種間の関係に適用できると考えた。
- エ ボガードスはパークによる社会的距離概念を否定し、親密度を量的に把握するためのスケールを新たに考案した。
- オ ボガードスはシカゴで激化していた東洋系移民への人種差別を調査するために、社会的距離の概念に改良を加えた。

問二 傍線部 B 「都市社会学の本拠地シカゴ」にまつわる状況について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア シカゴは全米第二の都市となって以降、二〇〇万人を超える人口を維持してきた。
- イ 一九一九年に発生したシカゴ人種暴動では、黒人のみならず白人にも死者が出た。
- ウ シカゴ人種暴動の発端は、警察が抗議に集まっていた黒人を逮捕したことだった。
- エ 一九二〇年のシカゴの人口は二七〇万人ほどで、そのうち黒人は二万人だった。
- オ シカゴ大学においてパークらが活躍した頃に、シカゴ学派の黄金時代が築かれた。

問四 傍線部 C 「ゲオルク・ジンメル」の思想内容として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 目には社会学的機能があり、たとえば目を伏せる行動にその機能を見出すことができる。
- イ 人間において目は顔と同じく最も重要な器官であり、個人の持続的な特徴を示している。
- ウ 大都市における人間関係を理解するうえで重要なのは、眼差しよりも他者の知覚である。
- エ 顔に目が位置しているため、人間同士の眼差しにおいては他者の顔が最初の客体となる。
- オ 大都市では人々が分散したり密集したりするため、空間隔離という考え方が必要となる。

問五 傍線部D「よそ者」とあるが、ジンメルの理解によれば、大都市における「よそ者」とはどのような存在か。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 潜在的な放浪者であり、いつでも自由に大都市を去っていく存在。
- イ 大都市で生活を送りながら、そこに溶け込むことのできない存在。
- ウ 大都市に対して近しさを感じ、その社会にしばらくとどまる存在。
- エ 大都市ベルリンで暮らすユダヤ人のように、故郷を喪失した存在。
- オ 異質性をもつがゆえに、大都市の現象を客観的に観察できる存在。

問六 傍線部E「ジンメルが説いた「よそ者」の特性」とあるが、この「よそ者」と写真の関係について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア もともと写真とは、異郷から大都市にやってきた「よそ者」が発明した技術であった。
- イ 「よそ者」である日本人を初めて写真に収めたのは、黒船で来航したアメリカ人だった。
- ウ 写真史初期の時代には移動式の写真館が多く、そこでは「よそ者」が写真を撮っていた。
- エ 小型カメラが一般化すると、社会学者や人類学者は「よそ者」として写真を撮影した。
- オ フランクは「よそ者」の視覚を手に入れるために、スイスを離れて写真を撮り続けた。

問七 二重傍線部「ロバート・E・パーク」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア パークはシカゴ大学に招かれる以前に、シカゴで新聞記者として働きながらジンメルに師事し、彼の下で都市社会学を学んだ。
- イ パークはあるエッセイにおいて、日本人や中国人に対して白人が抱いている偏見を「仮面」という表現を用いて描写した。
- ウ 黒人社会学者が執筆した『ブラック・メトロポリス』は都市社会学の傑作として知られ、パークが長文の序文を寄せている。
- エ ジンメルの「空間隔離の社会学」をいち早くアメリカに紹介したパークは、彼の思想を吸収して社会的距離理論を展開した。
- オ ユダヤ人だったジンメルとは異なり、パークはユダヤ人をよそ者の典型として理解し、彼らを「マージナルマン」と呼んだ。